

健康 医療

「下肢静脈瘤」についてもっと具体的に知りたいという声に応え、前川外科・内科の前川卓史先生に具体的な事例を伺いました。

かしじょうみやくりゅう

下肢静脈瘤と日帰り手術

●下肢静脈瘤は、血液の逆流を防いでいる脚の静脈にある弁がきちんと閉じなくなり、血流が逆流してしまう病気です。女性に多く見られ、妊娠・出産がきっかけとなったり、立ち仕事をしている方、重い荷物を持つ事の多い方、家族にすでに下肢静脈瘤の方がいる場合などになりやすいといえます。症状としては、だるさやむくみ、寝ていて朝ふくらはぎがつるなどがあります。見た目ではわかりません。



前川外科・内科 前川卓史先生

合は、すでに何年も逆流状態が起こっているということです。

●69歳女性の場合、以前から静脈瘤があって、徐々に色素沈着が見られるようになり、痛みを自覚。我慢していましたが、痛みが強くなってきたため受診。下肢静脈瘤鬱滞性(うったいせい)皮膚炎と診断。痛みを我慢できない右足をまず9月に手術し、左足も皮膚潰瘍になってきたため11月に手術。両足ともよくなり、これまで思うようにできなかったスポーツを楽しんでいます。

●83歳女性の場合は、痛みがなかったために、長い間、放置していたところ、静脈瘤に沿って赤く腫れ、痛みがでてきたことから受診。血栓性静脈炎でした。この場合も日帰り手術でよくなり、元気に帰られました。

●日帰り手術は、高周波アブレーションカテーテル治療による手術で、一足1時間ほど。両足の場合でも1時間半ほどで終わります。

●高周波アブレーションカテーテル治療は、細い管(カテーテル)を、原因となった静脈の中に入れて、内側から熱を加えて焼いてふさいでしまう治療です。「血管を焼いてしまっても大丈夫ですか」という質問をよく受けますが、問題ありません。通常、静脈瘤ができる場所は、表在静脈であり、この血管はネットワークがあるため、一部の表在静脈を焼いてしまっても大丈夫です。局所麻酔で行い、術後、すぐに歩けます。

●下肢静脈瘤は、表面の血液の逆流から生まれる鬱滞(うったい)を解除すれば、症状は改善されます。手術の対象になるのは一部で、エコー検査で判断します。手術以外の選択肢としては、弾性ストッキングによる圧迫療法、硬化療法があり、症状と希望に沿って応えます。



▲下肢静脈瘤



▲うっ滞性皮膚炎

■前川外科・内科では下肢静脈瘤の日帰り手術を行っています。

前川外科・内科は、豊橋に開業して35年。前川和男院長と前川卓史先生による二人診療体制で地域の人たちのホームドクターとして健康をサポート。名古屋大学医学部付属病院の血管外科医として勤めてきた前川卓史先生が、下肢静脈瘤の最新の血管内治療を行っています。「患者さんのお話をしっかりと伺うことを第一に心がけています。下肢静脈瘤についてお悩みの方は、お気軽にご相談ください」

前川外科・内科

豊橋市東岩田4-11-5 0532-62-6411

www.maekawa-gekanaika.com

